

# 早稲田社会学会ニュース 第26号

2005年9月9日発行

早稲田社会学会事務局

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部 社会学研究室内

Tel: 03-5286-3742

E-mail: socio-office@list.waseda.jp

URL : <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

## 今回のニュースの内容

1. 第57回早稲田社会学会大会の報告
2. 早稲田社会学会総会の報告
3. 研究例会の報告
4. 2004年度研究助成の報告
5. 2005年度の研究助成について
6. 「早稲田社会学会会則」の一部改正について
7. 役員交代について
8. 学会HPについて
9. 入退会者のお知らせ
10. 学会費納入のお願い

### 1. 第56回早稲田社会学会大会の報告

第57回早稲田社会学会大会は、2005年7月2日(土)に早稲田大学文学部 36号館 681教室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

#### 一般報告

司会者：笹野 悦子(早稲田大学) 池田 祥英(早稲田大学)

報告者：牧野 智和(早稲田大学教育学研究科)：少年犯罪を「解決」したのは誰だったのか？

『朝日新聞』の報道の分析から

平野 直子(早稲田大学文学研究科)：新聞・雑誌記事における<新宗教>言説の発生と展開

石黒 史郎(早稲田大学文学研究科)：戸田貞三初期著作における統計的研究スタイル導入の論理

『家族研究』以前の著作を中心に

#### シンポジウム

テーマ：「地域空間における共同性」

司会者：加藤 彰彦(明治大学)

報告者：鳥越 皓之(早稲田大学)：場所性と共和主義

玉野 和志(首都大学東京)：空間の生産 アンリ・ルフェーブルとロラン・バルト

池田 寛二(法政大学)：地域空間における所有の正義と公共性の再審

討論者：森 元孝(早稲田大学) 横田 尚俊(山口大学)

これまで社会学が分析対象として自明視してきた「社会」が、いま溶解しつつあるのではないか。「社会」とは何かということに関して、いま社会構成員たちは共通するイメージを思い描けていないのではないか

これが今期（2002～2005年）の研究活動委員会の基本的な問題関心であった。過去2回のシンポジウムと3回の研究例会も、「社会」の溶解あるいは「社会／社会学」の存立根拠の喪失の問題を軸に企画された。本年度のシンポジウムは今期の最終回でもあるので、地域社会の現場に寄り添いつつ独自の議論を展開されている先生方をお招きして、「社会／社会学」の存立根拠の回復・再生について、「身体性」「風土」「場所性」「空間」「共同性」「公共性」などをキーワードに自由に語っていただいた。

鳥越皓之氏（早稲田大学）は、まず「場所性」の概念が（1）地域の特定空間としての場所（地域風土や歴史的記憶の詰まった場所）と（2）社会関係としての場所（社会のなかの安定した拠点としての場所）という二つの意味をもっていることを指摘した。そのうえで、宝塚市のある汚れた小川に数匹の鯉が放たれたことをきっかけにして、人びとが小川に集まるようになって「鯉のいる川としての場所」（の場所性）が成立し、同時に清掃や美化などの小川をめぐる活動が軸となって「仲間的共同性をもったコミュニティ」（の場所性）が形成されていくプロセスについて報告した。さらに鳥越氏は、こうした「場所」を契機として「共同性」が成立していく過程は、政治思想的には「共和主義的秩序化」として理論化できると主張された。こうした秩序形成は、現在多くの地域で「まちづくり」などの表現をとって行われているので、「長期的にはみれば共同性は霧散することはない」との発言が印象的であった。

玉野和志氏（首都大学東京）は、ルフェーブルとバルトの都市論・空間論をベースに、近代的な幾何学的空間概念と、社会的空間の概念を対比させた。前者は好きところで切り売りできる空間（容易に商品化される空間）であり、それゆえ共同性の存立しえない空間であるのに対し、後者は人びとのつながりや思い出の埋め込まれた社会的空間である。そして、氏の調査事例から「妙に近代的な町会長」と「おそろしく保守的な町会長（没落した地主）」のエピソードを紹介して、「空間を手段としか見ない近代的な発想」と「空間に社会的つながりを見る保守的な発想」の違いを浮き彫りにした。そのうえで、戦後の民主化が封建遺制の名のもとにふり捨ててきた社会的な共同性 空間的に保持される共同的集団の伝統、文化、記憶 をどう腑分けし、どう継承していくかという問題を考えるべきときに来ていることを指摘された。

池田寛二氏（法政大学）は冒頭、鳥越氏の「長期的にはみれば共同性は霧散することはない」という主張に対して、グローバル化の進展とこれに連動する市場の威力に注意を促して、所有論的な正義論を構築する意義を強調した。氏はまず、「コモンズ保全協会」の設立に参加したJ.S.ミルの古典的なコモンズ論を紹介し、ミルの思想が単なる功利主義ではないことを示した。さらに、J.ロールズの正義論とその功利主義批判およびA.センによるロールズ批判を検討したうえで、ミルのコモンズ概念は、共同体的な「共有資源」ないし「共有財」を意味しているのではなく、不特定多数の個人が利用したり立ち入ったりできる権利の対象としての「公共財」という意味でのコモンズであると指摘して、「共同体から切り離されたコモンズ（公共性にかかれたコモンズ）」の可能性を主張された。

以上の報告に対して、討論者の森元孝氏（早稲田大学）は近代的な視点からは否定されがちな「共同性」「伝統性」「保守性」の内部に潜在している自由という問題を提起され、横田尚俊氏（山口大学）はご自身の山口市での社会活動の経験をふまえて、地方における「共同性」の強固さを強調された。「共同性の喪失」という言説自体がイデオロギーであるとの指摘が印象的であった。たしかに「社会の溶解」は人工空間化が進んだ大都市に特徴的な現象なのかもしれない。しかし、地域空間を超えるよりマクロな社会空間の統合問題は（これは「共同性」というより「公共性」の問題であるが）、グローバル化により市場の威力がますます強まることを考えれば「液状化」の視点でとらえることの意義は大きいといえるだろう。

フロアからもたくさんの質問・意見が出され、活発な討論が行われた。とはいえ、時間の関係から発言を断念された方も多かったのではないかとと思われる。司会の力不足をお詫びするとともに、来年以降はシンポジウムの開始時間を30分程度早めることを、次期研究活動委員会に提案しておきたい。

## 2. 早稲田社会学会総会の報告

2005年7月2日に、大会に引き続いて開催された総会において以下の事項が報告されました。

- 1) 理事会および研究活動委員会、編集委員会の活動報告(2004年7月～2005年7月)
- 2) 2005年度研究助成の申請と採用の経過について(庶務担当理事)
- 3) 企画委員会の活動について

また、同総会において以下の議案が提案され、慎重な審議の結果、すべて原案どおり可決されました。

- 1) 規約改正について(本レターの6.をご参照ください)
- 2) 2004年度決算案の審議と承認(同封の決算報告をご参照ください)
- 3) 2005年度予算案の審議と承認(同封の予算報告をご参照ください)
- 4) 次期役員の選出(本レターの7.をご参照ください)

## 3. 研究例会の報告

第25回研究例会(2005年度第1回)、第26回(第2回)研究例会が、以下のとおり開催されました。

### 第25回研究例会

「モダン・ポストモダンの社会学理論」講演会

日時：2005年5月12日(木)13:30-18:00

会場：早稲田大学国際会議場第三会議室(総合学術センター内、3階)

報告者および報告題目：

Randall Collins 米国ペンシルベニア大学教授(社会学)・・・「超官僚制化としてのポストモダン」

Scott Lash 英国ロンドン大学教授(社会学)・・・「ポストモダンと普遍的メディア化」

### <研究例会報告>

Randall Collins 博士と Scott Lash 博士による講演会「モダン・ポストモダンの社会学理論」には学部学生・大学院生を中心に100名を越える参加者があった。

初めに、Randall Collins 博士が「超官僚制化としてのポストモダン」と題して、官僚制の下にある近代から超官僚制化するポストモダンへの変化について、Weberの官僚制理論に基づいて議論された。1時間半の講演の骨子は次のとおりである。近代の官僚制の重要な特徴を「公的規則の遵守」と「記録の保存」にあると規定し、情報化の流れの中で、これら特徴の拡大・強化によってもたらされる状況が「超官僚制」である。中央集権的な近代官僚制の持つ垂直的ヒエラルキーは、水平的に関係する組織形態に変化し、個々の明確な境界は消滅して、開かれたネットワーク的な組織へと変化した。さらに、規則や記録保存はテクノロジーの進歩によって飛躍的に拡大したが、それはポストモダニティの形而上学的変化とも言える。このような超官僚制化は民主主義の制度の中で育まれたということさえでき、新たな社会運動も超官僚制化の波に飲み込まれ、その傾向をさらに強固にしていこう。超官僚制化に抵抗しうるのは、ひじょうに小さな規模で遂行され、権力を目的としない運動だといえよう。

続いて Scott Lash 博士が「ポストモダンと普遍的メディア化」というテーマで、Collins 博士同様近代からポストモダンへの変化をまったく異なった観点から議論された。議論において、近代を合理的社会と位置づけ、ルールは遵守されるべきであったのに対し、現在をメディア社会と位置づけ、ここではルールは遵守されるよりもルールを生産することに特徴が見出された。ルール生産的な社会は、ひとつのルールによって統一化されるというよりは、差異を生み続ける社会にほかならない。社会におけるルール生産のメカニズムは遺伝子情報のメカニズムになぞらえて説明される。すなわち、DNAによって情報がコピーされ、細胞という

環境がその情報を取捨選択するように、メディアの環境を構成するわれわれ人間存在が個々の視点から情報を選択する。情報という差異はわれわれを通じてさらなる差異を生み続ける。現代のようにメディアが強力化した社会では情報の極端な差異化が進み、統一化を指向する社会的ルールは弱体化し、結果として官僚的支配は弱体化することになる。

以上が講演の概要であるが、その後時間の許す限り活発な質疑応答がなされた。お二人の議論の食い違いについて、歴史に依拠する Collins 氏のペシミズムと未来志向的 Lash 氏のオプティミズムに基づくものかもしれないという説明もなされた。フロアからは、両者の架橋を模索して、Collins 氏の超官僚制化の議論が特徴として挙げた 記録の詳細化と増大化 公的規則の遵守について、は厳格化よりもむしろ曖昧化を産むのではないかと。また、 と を合理性で結ぶときに一つの合理性ではなく複数の合理性で結ぶと考えれば Lash 博士の差異化するメディア社会という見解との接点が見出されるのではないかとという意見も出された。  
(研究活動委員：笹野 悦子)

## 第 26 回研究例会

日時：2005 年 5 月 21 日 (土) 13:00 - 16:00

会場：早稲田大学文学部 (戸山キャンパス) 第 4 会議室

報告者および報告題目：

下村 恭広 (玉川大学専任講師): 「国家空間の重層的再編と地域社会」

熊本 博之 (早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程 / 東洋大学社会学部非常勤講師):

「生活環境主義が描き出す地域社会 普天間基地移設問題を事例に」

### < 研究例会報告 >

今回の研究例会は、7月の大会シンポジウム「地域空間における共同性」のプレ企画として開催し、下村氏・熊本氏の両会員に、それぞれの研究フィールドから見えてくる地域社会の現状と社会学的知見について報告していただいた。

下村氏からは、産業廃棄物問題で揺れた香川県豊島とその隣の直島でのフィールドワークに基づいて、地域社会が現在どのような再編の過程にあるのか、報告があった。下村氏によれば、豊島は長年の住民運動の末に、産廃問題の「解決」を勝ち取ったものの、高齢化と人口減少が進み水田・棚田の維持・管理もままならなくなるなど、地域社会としての存立の危機に直面している。他方、産廃の中間処理施設が建設されることになった直島は、経済産業省・産業界主導によるリサイクルの産業化と地域開発(「エコタウン事業」)の流れに乗り、中国をも視野に入れた国際的な再生資源市場の中での生き残りを図っている。このように、現在、各地域社会は、従来の国家 - 都道府県 - 区市町村というリジッドな構造から切り離されて、グローバルな地域間競争の中に再編成されつつあり、こうした状況の中で、地域間競争の「主体」としてではない形で地域社会の存立はいかにして可能か、という問いが提起された。

他方、熊本氏からは、米軍普天間基地移設問題を抱える沖縄県名護市の辺野古地区でのフィールドワークに基づいて、混沌とする地域の実態を記述するための方法論としての「生活環境主義」の有効性について、報告があった。熊本氏によれば、辺野古地区の住民の多くが米軍基地建設に反対の意志を持ちつつ、受け入れを容認しようとしている背景は、地域住民のリアルな生活と「言い分」を重視する「生活環境主義」の立場によって、十分に記述することが可能になる。詳細な聴き取り調査の結果、住民たちは、振興策による経済効果への期待や、地域の分裂を避けたいという思いから、基地建設をやむをえず容認するという「言い分」を持っており、これは過疎化が進み、経済的にも停滞している同地区においては強い説得力を持っていることが明らかとなった。そして、こうした住民の「言い分」からすれば、外部から訪れる基地反対運動の活動家たちが掲げる反戦平和やジュゴン保護の主張は「よそ者」の論理として斥けられ、当の地域から乖離せざるをえない、との指摘があった。

両氏の報告とも、一方は産廃問題、他方は米軍基地問題という重大な問題を抱えた地域を対象にしており、

事例の紹介自体が極めて興味深いものであった(両氏が現地で撮影した写真や住民の証言など豊富な資料が、報告の説得力を高めていた)。さらに、一方は、政府の地域開発計画の変遷や産業界の再編をも射程に入れた構造分析、他方は、住民たちの語りの詳細な聴き取りによるリアリティの解明、という対照的な手法を用いながら、それぞれの地域が抱える問題の本質に迫ろうとする姿勢がうかがえ、印象的であった。

例会当日は、「郊外」はこれらの地域と同様に扱えるのかという質問や、「生活環境主義」や「サステナビリティ」概念と「生活者」論や「生活保守主義」との関連の有無など、いくつもの興味深い論点が提起され、活発な議論が行なわれた。

普段の研究例会に比べて参加者は幾分少なかったとはいえ議論は充実し、地域研究の専門家以外にとっても非常に刺激的で有益な例会であった。

(研究活動委員：大谷 崇)

#### 4. 2004 年度の研究助成報告について

昨年度の研究助成の対象は、次の 2 つの研究でした。

研究題目：「普天間基地移設問題ならびにその反対運動に対して『地元』が抱いている意識に関する追加調査」

研究代表者：熊本 博之（早稲田大学院文学研究科）

助成額： 15 万円

研究題目：「早稲田大学シュツツ文庫・未公開資料の整理検討に基づく

『行為動機的一般理論』の成立過程と理論的射程についての研究」

研究代表者： 木村 正人（早稲田大学院文学研究科）

助成額： 15 万円

このたび、2004 年度研究助成の対象となった研究について成果の概要について以下の報告が提出されました。

##### 「普天間基地移設問題ならびにその反対運動に対して『地元』が抱いている意識に関する追加調査」

熊本 博之（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程 / 東洋大学社会学部非常勤講師）

本研究助成を受けてなされた調査は、2004 年 8 月 6 日から 22 日にかけて、沖縄県名護市において実行されました。このような長期間にわたる調査を行う機会を与えて頂きましたことを、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

普天間基地移設問題とは、沖縄本島中部にある宜野湾市の中心に位置する米海兵隊基地、普天間飛行場を、本島北部の名護市東部、辺野古（へのこ）沖の海上に移設するという計画です。この移設については、沖縄県、名護市の受け入れ表明を受けた後、99 年 12 月に閣議決定されています。現在は、この閣議決定に基づいて移設に向けた計画が進行しており、代替施設建設による環境への影響を評価する環境アセスメントの手続が進められている一方で、その結果を待つことなく防衛施設庁は、04 年 4 月より、移設予定地の海底の地盤を調べるためのボーリング調査を始めるべく辺野古に日参しています。

私は 03 年に、別の研究奨励金を受けて、名護市において半年間にわたる長期調査を行ってきました。この時期は、移設に向けての具体的な進展がみられなかった時期であったため、反対運動の行動も世論喚起的なものに留まっていた一方、辺野古の住民もまた、事態の推移を見守っているという状況にありました。

しかし上述のボーリング調査の実施に向けて防衛施設局が動き始めた 04 年 4 月以降、ボーリング調査の実施は実質的な着工であると認識した反対運動は、辺野古の漁港そばにテントをはり、連日座り込んで抗議行

動を展開しはじめます。さらに同年9月に防衛施設庁が海上にやぐらを建設して以降は、海上でも抗議行動がなされています。このように事態が進展したことにより、辺野古の住民の態度にも変化が見られているであろうことが予想されたため、今回、追加調査という形でのフィールドワークを実行させていただきました。

果たして辺野古の住民からは、受け入れや反対運動についての多様な意見を伺うことができました。その結果、受け入れに関しては、積極的に誘致しようとしている住民はいないものの、受け入れに伴う振興策への期待、過去に米軍基地キャンプ・シュワブを受け入れたことによって地域が潤ったという歴史、シュワブに関連して生じる様々な収入の存在、受け入れの是非を問う住民投票やその後の市長選挙などを通して地域住民が二分してしまった経験、移設が閣議決定された「国策」であるという事実などから、地域全体としては「本当は来てほしくないのだけれど受け入れるしかない」というあきらめにも似た雰囲気形成されているということが見えてきました。

また反対運動に対しては、感謝の気持ちがある一方で、反戦平和に彩られた主張に対する批判的な意見も聞かれ、「辺野古のための運動ではないのではないか」という住民の疑念が垣間見られました。

これらの成果をもとに、第77回日本社会学会大会、第30回地域社会学会大会、カルチュラルタイフーン2005、沖縄学研究所2005年度研究発表会の各会において、研究報告を行ってまいりました。詳細は私のホームページ([www.hi-ho.ne.jp/hirokuma/](http://www.hi-ho.ne.jp/hirokuma/))にてレジюмеを公開しておりますので、ご笑覧いただければ幸いです。

#### 「行為動機の一般理論の成立過程と理論的射程について」木村 正人（早稲田大学）

本研究の目的は、行為動機の一般理論として構想されたA.シュッツ「関連性理論（Relevance Theory）」の学史的な解明である。この理論は行為動機の一般理論を構想した彼の草稿によって展開された未完のプロジェクトとしてあり、草稿の主要部分はすでに公刊されているが、この理論の形成過程および理論的射程については今なお十全に解明されておらず、遺された資料の緻密な精査にもとづくその解明が望まれている。

申請者はとりわけこの理論の形成過程に及ぼされた多彩な理論家たち（J.デューイ、E.フェーゲリン、F.カウフマンら）との対話の影響を重視し、書簡や手書き草稿、蔵書への書きこみなど未公刊の諸資料を丁寧に読み解くことによって、シュッツの理論的展開に及ぼされたさまざまな影響を検討し、そこに示唆されるこの理論の意義と射程について明らかにするよう努めてきた。

今回とりわけ関連性理論の形成過程に焦点化して、主として以下のように資料整理を進めた。1) 早稲田大学保管のシュッツ草稿（12000頁）のうち、とりわけレリヴァンスを主題とする草稿類、プラグマティストについて研究したノート；書簡集（2600頁）のうちとりわけフェーゲリン、カウフマンとの往復書簡；およびヴァーグナー文書（2600頁）の精査とリスト化、主要資料の一部スクリプト化。2) 海外資料館からの早稲田未収録資料の収集：ミュンヘン大学（独）保管のフェーゲリン資料、コンスタンツ大学（独）社会科学資料館保管のシュッツ、カウフマン、デューイ資料の閲覧・複写。

資料の吟味から得られた知見は、概略ふたつの方向で今回の成果としてまとめられた。

ひとつにはシュッツとプラグマティストの関わりに関するものである。行為動機の一般理論を構想するシュッツ理論が、類型化・レリヴァンスにもとづく経験を問題解決の過程として捉えるにあたって、プラグマティズムの知見を批判的に摂取してきたことは、本研究がこれまで注目してきた点であるが、今回新たに収集した資料には、探究の論理学について討議したデューイ、A.ベントリー、カウフマンらの書簡、およびシュッツの生前の蔵書のうちデューイらによる著書に記されたノート等が含まれる。フッサール現象学にもとづく社会理論を彫琢したシュッツは、W.ジェームズ、Ch.S.パースのプラグマティズムを独自に社会的行為論として展開したデューイの著作に着目し、その際、「合理性」、「習慣としての論理形式」、言語の「機会因性」といった諸概念に、現象学的な洞察との親和性を見ていたことが、上記の諸資料から明らかになった（木村正人、2005、「シュッツはデューイ『論理学』をどう読んだか」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』(51)）。

いまひとつはシュッツが政治哲学者フェーゲリンとの対話を通じて彫琢した視野についてである。のちに

公刊されたいわゆる「レリヴァンス草稿」(執筆は1947-1951)は、レリヴァンス諸体系間の関係を取り扱う「空隙の哲学」という名の断章をもって途絶している。この問題が十全に論及され、関連性理論の射程が開示されるためには、シュッツの多元的現実論がシンボルの理論として展開される必要があった。この理論展開に影響を及ぼしたのが、フェーゲリンのシンボリック秩序論であり、彼との21年間にわたる書簡でのやり取りであった。これについては、8月開催予定の国際会議(II OPO Meeting in Peru, *Organization of Phenomenological Organizations*)にて報告を予定している。

## 5. 2005年度の研究助成について

2005年度の申請について3件の申し込みがあり、前回理事会での審議の結果、申請書の再提出を依頼した。今回は再提出書類をもとに検討し、以下のとおり決定した。

### 2005年度研究助成

- 1) 研究題目:「社会学の成立と発展におけるガブリエル・タルドの役割について」  
研究代表者: 池田 祥英(早稲田大学)  
助成額: 10万円
- 2) 研究題目:「現代日本の巡礼・遍路に見るスピリチュアル文化の諸相の研究  
ウェブコミュニティの分析を通して」  
研究代表者: 河野 昌広(早稲田大学院文学研究科)  
助成額: 10万円
- 3) 研究題目:「サブカルチャーに関する文化産業論的研究  
オタク現象の構造連関分析を中心として」  
研究代表者: 七邊 信重(早稲田大学院文学研究科)  
助成額: 10万円

## 6. 「早稲田社会学会会則」の一部変更について

7月2日に行われた総会において、庶務委員会より規約の改正案が提案され、審議の結果、承認された。会則の主な変更点は以下の通り。

庶務委員会の設置規定を、会則第8条(3)に明記する。

第14条(4)事務局幹事を役員から削除し、庶務委員会の下に置く。それにしたがって第15条(4)「事務局幹事は理事会の議を経て総会で承認し会長が委託する」、16条(4)「事務局幹事は理事会の決定に基づき会務の執行を補佐する」を削除する。

## 7. 役員交代について

2005年7月2日の総会において、会則第十五条および「早稲田社会学会・理事候補者推薦委員会」規定にもとづき、理事候補者推薦委員会より次期の理事候補および監事候補として次の13名が推薦され、審議の結果、全会一致で承認されました。(敬称略、氏名50音順)

## 【理事】

白井 恒夫（早稲田大学） 大久保孝治（早稲田大学）  
長田 攻一（早稲田大学） 坂田 正顕（早稲田大学）  
桜井 洋（早稲田大学） 嶋崎 尚子（早稲田大学）  
店田 廣文（早稲田大学） 濱口 晴彦（創造学園大学）  
長谷 正人（早稲田大学） 山崎 哲哉（武蔵大学）  
山田 真茂留（早稲田大学）

## 【監事】

加藤 彰彦（明治大学） 池岡 義孝（早稲田大学人間科学部）

また、会則第十五条(一)にもとづき、新理事会の互選により次期会長候補として濱口 晴彦氏が選出され、同総会において審議の結果、全会一致で承認されました。

同日開催された臨時理事会において協議の結果、新理事会の構成について、次の担当分掌が決定されました。(敬称略)

会長： 濱口 晴彦  
庶務担当理事： 長田 攻一、店田 廣文  
編集担当理事： 大久保孝治、桜井 洋  
研究活動担当理事： 山崎 哲哉、山田 真茂留  
会計担当理事： 坂田 正顕、嶋崎 尚子  
渉外担当理事： 長谷 正人、白井 恒夫

## 8. 入退会者のお知らせ

理事会において以下6名の入会が承認されました。(以下、敬称略)

2005年6月11日理事会

佐藤 純子（早稲田大学大学院人間科学究科） 平岡 彰夫（早稲田大学大学院社会科学研究科）  
石黒 史郎（早稲田大学大学院文学研究科） 平野 直子（早稲田大学大学院文学研究科）  
鳥越 皓之（早稲田大学大学院人間科学学術院）

2005年7月2日理事会

板橋 亮平（中央大学経済研究所）

以下の会員（2名）がご逝去されました。

曾良中 清 2005年6月ご逝去 藤田 豊 2004年ご逝去

## 9. 学会ホームページについて

2004年度より早稲田社会学会 Web サイトが開設されております。会則・規約類や役員・委員一覧、大会・総会の開催案内、研究例会等の開催案内、『社会学年誌』についての案内、「早稲田社会学会ニュース」、『年誌』投稿・大会報告・研究助成等の募集案内、その他の連絡事項が掲載されているほか、入会申込書、研究助成申請書等の各種用紙もダウンロードできます。URL は以下のとおりです。

<http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

なお、本ページ作成およびサイト開設作業に際して、杉本昌昭会員の全面的なご協力をいただきました。学会事務局より感謝申し上げます。

## 10. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方、および過年度分の未納がある方宛てに、振り込み用紙（お名前と該当の未納年度を印字しております）を同封いたします。早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

口座番号：00100-3-38020（郵便振替）

加入者名：早稲田社会学会

（年会費：一般会員 5,000 円 学生会員 3,000 円）

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。

会費を3年以上滞納されますと、2000年7月8日の総会決議および2000年12月16日の理事会決議にもとづき、会員資格の一部が停止されます（次の3つの権利が失われます。学会大会で報告すること『社会学年誌』へ投稿すること『社会学年誌』の配布を受けること）のでご注意ください。

2000年12月16日の理事会決議にもとづき、事務局では「未納会費の一部が納入された場合には、1997年度以降の最も古い年度の未納分から優先的に充当」する処理をとっております。したがって、本年4月以降にお振り込みいただいた会費が、本年度（2005年度）分ではなく、過年度の未納分として充当されている場合もあります。ご了承ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局（[socio-office@list.waseda.jp](mailto:socio-office@list.waseda.jp)）までご連絡ください。

以上